

(抄録)

研究課題名：

明治期における女子バスケットボールの移入と普及に関する一考察
—成瀬仁蔵の「球籠遊戯」と「日本式バスケットボール」にみる運動技術に着目して—

研究者氏名：渡邊 瑛人

本研究は、明治期の日本における女子バスケットボールの移入と普及の実情について、成瀬仁蔵が指導した球籠遊戯と日本式バスケットボールを基に詳らかにする。また、バスケットボールで使用された服装や用具について考察し、当時の技術の様相を再構成する。

本研究では、梅花女学校と日本女子大学の記念誌や各新聞社が発行している当時の新聞記事、成瀬の著書をはじめとする女子体育やバスケットボールに言及した当時の遊戯書、指導書、回顧録などを文献史料として用いる。これによって、明治期に求められていた女性スポーツの役割、実際にどのような運動が行われていたのか、を考察する契機とする。

成瀬が梅花女学校で行った球籠遊戯は、女性に対する世間の意識改革に尽力した。この籠球遊戯は、日本国内におけるバスケットボールの発信地となっただけでなく、「見るスポーツ」として、これまで推奨されてこなかった競争的な要素を含んだ球戯の伝播に、ひと役買った可能性を示唆できる。

日本女子大学で行われた日本式バスケットボールは、多くの観衆を集める演目として、人気を博した競技であった。その内実は、多くの競技者が動く限られた空間の中で、巧みにパスを駆使してゲームが行われた。また、ルールの改正を繰り返す中で、運動量を制限するルールの採用は、当時の女性観のニーズに対応した。このルール改正は、バスケットボールが世間に受け入れやすくなった要因の1つと考えられる。成瀬の帰朝から約15年で、対外試合を行えるまで普及した。さらに、その内実は、複数回のゴールが容易になるまでに進歩したことが確認できる。

明治期の女子バスケットボールは、下肢での激しい運動は制限されたものの、上肢を中心にボールを扱う技量の研鑽は始まっており、今日のバスケットボールにおける技術の土壌を形成していたといえよう。

明治期のバスケットボールは、女性の「休養」を目的とした遊戯での扱いを巧みに利用することで、競争性を多分に有する球戯の発展にひと役買ったといえる。